

---

# 飽和

朔

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

飽和

### 【Nコード】

N3926Q

### 【作者名】

朔

### 【あらすじ】

「ぼく」と「彼女」の日常的な風景。  
音楽にまつわる一風景。

ぼくは部屋の窓際に腰掛けて、煙草に火をつけた。小さな部屋だが、窓は割と大きい。

ふう、と煙草を一息吸って、それが灰と化してゆくように目をやった。父は、煙草を吸うときはずっと換気扇の下にいたことを、ふと思い出した。

そんなことを思い出させる夜だ。空気はかすかに湿っていて、しかし空に雲は目立たず、月や星が縦横無尽に行き交っている。

ぼくには彼女がいる。もうずっとここで一緒に住んでいる。ぼくが大学生になってしばらくしてからずっとだ。

「同棲しているの？」とぼくの大学の友人はぼくに問うが、ぼくはいつも「いや、一緒に住んでいるんだ」と言い返していた。同棲と言う言葉は嫌いだ。やけに野性的なおいがする。野性的なところが不必要だと言っているのではなくて、一緒に暮らすこと自体が野生化してはいないんじゃないか、というひとつの反抗みたいなものの。

彼女が冷蔵庫から発泡酒を二本取り出して、こちらへ持ってきた。彼女はそれらをいちど床に置いて、壁に立てかけてある折りたたみ式のガラステーブルをひろげた。そしてそこに発泡酒二本と灰皿を載せた。

この小さな部屋には音楽がかかっていた。なめらかな音が、いつも溢れている。

彼女が自分の家から持ってきたものはオーディオ・コンポだけだった。それはこの小さな部屋に似合わず、やけに高級な音を紡ぎ出したので、最初、ぼくはとても驚いた。そんなようすのぼくをみて彼女は満面の笑みを浮かべたのだった。だから、彼女が音楽に対して多くの愛情を注いでいたのがよくわかった。

ぼくは音楽にはさほど興味をいだかなかったので、もっぱら選曲は彼女の専門であった。ただ彼女は雰囲気をつくり出すのがとても上手なので、その選曲が的外れであることはなかった。

ついさっきから流れているアルバムには、ぼくは聞き覚えがなかった。ちょうど彼女がぼくの座っている場所の反対側に座ったので、「この歌、誰？」と訊いた。

「Sallyuっていうの、いいでしょ」

「うむ、声が音とうまく交わっている感じがする」

「なるほどね、いい表現」

そう言って彼女はぼくに二本のうちの一本の発泡酒を手渡して、自分の発泡酒のプルタブをあけた。ぼくもそれにならって自分の発泡酒のプルタブをあけた。カシュ、という軽い音が響いて、空気と混ざって消えた。

彼女がオーディオから流れてくる曲に合わせて、かすかにメロディを口ずさんでいた。ぼくにとってそれも部屋の一部で心地よいもののひとつだったので、何も言わなかった。

すると、ふいにそれが途切れて彼女が

「きょうは月や星が綺麗に見えるね」  
と言った。

「あれほど遠くにある星たちを不思議に思うことってない？」

ぼくは発泡酒をふたくち飲むくらい考えて、

「だからこそ、星たちはお互い自分を燃やして光っている」

「距離を知るため？」

「きつと」

ぼくと彼女はその言葉のあと、同じタイミングで発泡酒を口に含んだ。

それを飲み込んで、同じく飲み込んだ彼女にぼくは言った。

「これほど近くにあるぼくたちも不思議ではない？」  
と言った。

「なぜ？」

「はるかに遠くにあることとはるかに近くにあることは、どちらも同じように不思議に感じたから」

それから少しの空白の時間があった。空白の時間のなかでは、ぼくは音楽に耳を傾けながらまた煙草に火をつけて吸い、彼女は音楽に耳を傾けながら発泡酒を飲みすすめていた。

それは空白の時間でありながら、色彩をもった時間だ。

ぼくと彼女の中ではよくあることで、気まずいことなど微塵もなく、音楽だけがその場を支配している。

音楽が空気を通してやってきて、それはぼくと彼女にぶつかり半分は吸収され半分は跳ね返り、ぼくから跳ね返ったものを彼女が吸収し、彼女から跳ね返ったものを僕が吸収する。それをいつも続けていた。空気を音楽で飽和させることは、ぼくと彼女にとって、いっしょに必要なことなのだ。

「宇宙にも人間はとんでゆくことができるようになった」

ぼくは口を開いた。

「宇宙にはひとはいない」と彼女。

「星に逢いにゆくのかも」

「まるで星の光に導かれるように？」

「うむ、きつと星の光には孤独な磁力があつて」

「それはわたしたちももっている」

「ぼくたちがここで二人でいるように、星たちも引かれあっているのだろう」

「それを味わいに？」

「きつと恋人同士のキスのように甘い」

彼女は笑った。

空では星の往来が激しい。部屋では空気に乗って音楽がやさしく響いている。

飽和した世界の片隅で、ぼくと彼女は飲みかけの発泡酒で乾杯した。

そして、孤独な磁力に導かれて、ぼくたちは甘いキスをした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3926q/>

---

飽和

2011年1月28日15時28分発行